

[学位論文審査結果要旨]

論文提出者 : 苗 婧

審査対象論文 : 郭嵩燾の西洋認識と儒教的思惟様式

——「理勢」論の近代中国における展開

論文審査委員 : 李曉東 教授、山本健三 教授、石田徹 准教授、
伊東貴之 教授 (国際日本文化研究センター)、
岡本隆司 教授 (京都府立大学文学部歴史学科)

論文審査結果の要旨

本論文は近代中国の最初の駐外公使郭嵩燾の西洋認識に関する研究である。郭嵩燾は清末中国の改革志向の知識人であり、彼の開かれた西洋認識と画期的な文明観が同時代において卓越したものであったことは従来の研究によく言及されているが、郭嵩燾はなぜそのような優れた西洋認識と文明観を形成することができたのかについては、これまで必ずしも十分に明らかにされていない。本論文はこの問題に正面から取り組んで論じたものである。

郭嵩燾の同時代の清末中国のエリートたちは儒教的知識人として中華中心主義——中国文明は唯一で絶対的な存在だと考える (true=mine, 真なるもの=自己のもの) ——という思考様式に支配されていた。そのような中で、郭嵩燾は西洋を文明として位置づけ、心よりそれを称賛したとともに、政治的社会的混乱に陥り弱勢にあった中国は本格的に西洋に学ぶべきだと強く説いた。郭嵩燾の西洋認識は新しい文明観の確立を意味するものであり、それは郭の同時代中国知識人たちが持ち得なかったもので、時代を画したものであった。

しかも重要なのは、郭嵩燾の開かれた西洋認識は、これまで多くの論者が考えているように、外交官として西洋社会で実体験した後に初めて確立したわけではなかった。本論文は、郭嵩燾の一貫した西洋認識構造は、彼が西洋に赴任する前にすでに確立したものであり、それは何よりも儒教伝統における「理勢」論的思惟様式に基づいて形成されたものだと実証した。

「勢」を重視する思想は中国の先秦時代に存在したものであり、「理勢」論は宋学の「理気」論の延長上に位置づけることができる。そして、「理勢」論の代表的な論者は明末清初の儒者で、郭嵩燾が生涯尊崇していた同じ湖南省出身の王夫之であった。「理」は「勢」の条理であり、「勢」は「理」の現実化という王夫之の「理勢合一」論は、「理」は現実の「勢」によって検証されなければならないという現実重視の論理であり、理念のドグマ化を防ぐ開放的な論理構造を備えている。王夫之の思想から大きな影響を受け

た郭嵩燾は自覚的に「理勢」の論理を用いて歴史を考察するとともに、現実の政治・外交をめぐる議論と実践に臨んだ。このような「理勢合一」的思考様式をもっていたからこそ、郭嵩燾は清末の洋務派が主張する「中体西用」——「体（道）」と「用（器）」とを分離させて考える——の論理を批判することができたし、また、「附会」——西洋の優れた文物は儒教における理想的な「三代」の聖人を体現したもので、したがって、西洋に学ぶのは「三代」に学ぶのだ——という論理にも与することはありえなかった。未曾有の西洋文明の衝撃によってこじ開けられた文化的空間の中で、「理勢」論は郭嵩燾の実践によって、その本来の開かれた性格を存分に発揮し展開することができた。それは郭嵩燾の開かれた西洋認識の思想的源泉であった。本論文は王夫之の「理勢」論と郭嵩燾の「理勢」的思惟様式との間の構造的同質性を丹念に論証し、両者のつながりを明らかにしたことに成功したと言える。「理勢」論をもって郭嵩燾の政治・外交をめぐる議論と実践を分析したのは本研究が初めてである。

その意味では、本論文の意義は郭嵩燾の西洋認識の画期性や先駆性を明らかにしたことにと止まらない。郭が自覚的に儒教的「理勢」論的論理を用いて西洋を認識した開かれた姿勢は、儒教をややもすれば前近代的でしたがって固陋で遅れた思想とする論調に対する有力な批判となるとともに、より普遍的な視野の中で西洋の「近代」と儒教とを捉えなおすというパラダイム転換を示唆するものでもある。

一方、「理勢」論に注目した本論文は、儒教哲学史の中で王夫之を捉え、近代中国思想史で郭嵩燾について議論を展開するという両面からアプローチしていることもあり、従来の学説史に対する整理は不十分であることは否めない。そして、このこと自体は本論文がもつ可能性を制限することにもなっている。それは結論の部分がやや抑制的になっているという問題にもつながる。

しかし、これらの問題点は本論文が有している意義と価値に影響するものではなく、論文は十分に博士学位のレベルに達している。

公開審査の結果の要旨

口頭試問では、まず、博論の著者である苗婧氏が論文の概要について説明した後、質疑応答に入った。5名の審査員および会場からの質問に対して苗氏が逐一答えた。

まず、本論文の特徴という質問に対して、著者は、①郭嵩燾が西洋諸国を「政教が修明であり、本末を兼ね備える」文明国だとしたうえでこれを高く評価した。このことは郭が伝統的文明観の閉鎖性を打破したことを意味している。本論文は、郭は同時代の中国エリート知識人たちに考えられなかった文明観の転換を遂げたことを実証的に論じた、②郭のこのような画期的な文明観はいわゆる「ウェスタン・インパクト」によって確立したのではなく、何よりも儒教思想における「理勢」の論理によって支えられ形

成されたことを実証的に論じた、③儒教思想が生み出した「理勢」的思惟様式は現代においても、現実を重視し思想のドグマ化を防ぐなど重要な意義をもっていることを示唆している、などの3点に分けて説明した。

著者の説明を受けて、審査員たちは、本論文は「伝統・近代」、「先進・後進」、または「東洋・西洋」のようなステレオタイプな西洋中心史観を克服するものであるだけでなく、儒教的知識人郭嵩燾を儒教の文脈に即して評価するという近年の研究方向からさらに一歩進んで、新しいパラダイムの模索を示唆している学術的意義を高く評価した。また、郭嵩燾の「理勢」的思惟様式を儒教の文脈の中で捉え、王夫之とのつながりを明らかにしたことは、これまでの研究でほとんどなされてこなかったことであり、その学術的価値を評価した。

一方で、審査員たちは、宋学を中心とした中国哲学をはじめ、学説史的整理が不十分なこと、先行研究をより正確にとらえることの必要性、また、結論では、本文中の議論を踏まえて著者自身の主張をより全面的に打ち出すことが求められることなどの問題点を指摘した。

次いで、審査員や会場のほうから、郭にとって、西洋とはどのような存在であったのか、郭嵩燾はなぜ開かれた西洋認識をもつことができたのか、近代西欧のモデルを郭嵩燾がいかにとらえたのか、郭嵩燾の現代的意義、そして、郭の開かれた思惟と儒教的論理との相関関係、などの質問が出された。

これらの指摘や質問に対して、著者はまず、審査員たちが指摘した問題点を真摯に受け止めて、「理勢」論を通して従来の研究枠組みで説明しきれていない郭嵩燾の開かれた西洋認識の画期性を明らかにしたが、まだ一つの新しい認識枠組みを提示するに至っていないため、今後の課題としたい、また、学説史の整理は今後の研究の中で改善していきたい、と回答した。

また、審査員や会場からの質問に対して、本論文の著者は、郭嵩燾にとって、西洋とは清末中国に新たな形の文明を示したものであり、中国が自己の文明を相対化し再認識するための「他者」であること、郭嵩燾が開かれた西洋認識を持つことができたのは、何よりも同じ湖南省出身の王夫之の「理勢」論による影響が大きかったからであること、また、郭が主として外交官として西洋社会に接したため、西洋社会の近代的文物から多くのことを学んだが、必ずしも西欧モデルそのものを十分に理解していなかったし、近代西欧の思想家からの影響も直接に受ける形跡はなかった。郭嵩燾の西洋認識の意義はやはり彼の開かれた儒教的思惟様式に求められること、そして、郭嵩燾の現代的意義として、郭の「理勢」的思惟様式は現代において、東西間の文明の捉え方、文化的多様性と普遍的価値との関係などの重要な課題を理解するための一助になること、などと適切に回答した。

最終試験結果の要旨

最終試験では、審査員が一同博士論文の意義と価値を評価し、論文は十分に博士学位のレベルに達していることを確認した。口頭試問での著者の応答は丁寧であり、博士論文の趣旨をより明確にするものであった。最終試験では、審査員たちは本論文に存在している改善を要する点についてより踏み込んだ形で指摘したうえで、改善方法についてコメントした。

審査委員会の所見

合格

論文の審査と、口頭試問、最終試験を通して、審査員一同は、本論文は博士学位のレベルに十分に達しており、博士学位の授与に値することで一致した。